

保育者養成校における自然保育の学習カリキュラムの検討

— 卒業生への質問紙調査の分析から —

Examination of the learning curriculum of the education and Care in Nature in the Child-Care Worker Training Course: An Analysis of Graduated Students Survey Results

堤 裕美 酒井 真由子 千葉 直紀
TSUTSUMI Hiromi SAKAI Mayuko CHIBA Naoki

本研究の目的は、本学の「自然保育関連事業の創設期」に在学していた卒業生に対して、在学時の自然保育への関心の程度や自然保育に対する認識を尋ねる質問紙調査を実施し、在学時の自然保育に対する認識の一側面を明らかにし、自然保育に関する学びの機会の設定や学びの仕組みを再構築することである。対象は、本学が自然保育に関する事業を開始した2016年度の卒業生から2019年度の卒業生計375名とし、配布できた352名のうち85名から回答を得た（回収率24.1%）。その結果、全体の8割以上の者が在学時に自然保育への関心があったことがわかった。しかし、学生の自主的な参加となる特化型の自然保育認定園の視察や「やまほいく研修会」に参加した者は1割から2割に留まっており、本学で授業外に設けた「やまほいく研修会」や特化型の自然保育認定園の視察は、学生の学びの機会としては十分に活かされていないことがわかった。また、在学時には、自然保育の実践や自然保育そのものに対する自分の考えを持ってはいても、それを他者に説明することまではできない傾向が伺えた。

キーワード：保育者養成 自然保育 授業 認識 質問紙調査

1. はじめに

長野県では、2015年に信州型自然保育認定制度を創設して以来、県が主体となって信州型自

自然保育の研修制度を設け、自然保育に関する研修会を開催している。信州型自然保育研修制度では、「私立園や公立園、保育所、幼稚園、認定こども園、認可外保育施設などあらゆる園種の自然保育認定を受けた、または認定を目指している保育者たちが、自然保育を学びあう」ことをその特徴としており、「自然保育の理念や効果を理解し、実践力を身に着けた保育者の育成」を目指している（藤田2022）。

保育所や幼稚園、認定こども園、認可外保育施設が信州型自然保育の認定を受ける、もしくは認定を更新するには、「自然保育を行う上で有効であると考えられる外部の研修等の場に参加した常勤の保育者がいる」必要がある。自然保育の認定園となるには保育者の自然保育研修会への参加を必須としていることから、保育者が自然保育について学ぶための自然保育研修制度を設けることは、自然環境や地域資源を活用した保育と保育者の質の向上につながると言えよう。

さて、信州型自然保育認定制度の創設を受けて、本学では地域に根差した高等教育機関として、教育(保育者養成)、研究、地域貢献という3つの観点から自然保育に関わっている（酒井2018）。とりわけ、保育者養成を使命とする本学において、保育現場で自然保育を実践していくことのできる人材を育成するために、2016年度より自然保育の授業や研修会、自然保育認定園への視察など、学生が自然保育を学ぶための様々な機会を設けてきた。今後、ますます自然保育が広がっていく中で、自然保育を実践していく質の高い保育者を養成するには、自然保育の学びの機会やその内容と方法、課題を検討していく必要がある。その前提として、まず、学生の自然保育への関心の程度や認識について検証し、その上で、自然保育に関する授業や研修会に対する学生の参加状況についても検証する必要がある。

そこで、本学が自然保育に関する研修会や視察といった自然保育関連事業の実施を開始した2016年度から自然保育コースを創設した2019年度までを「自然保育関連事業の創設期」とし、「自然保育関連事業の創設期」に在学していた卒業生に対して、在学時の自然保育への関心の程度や自然保育に対する認識を尋ねる質問紙調査を実施し、学生の自然保育に対する認識の一面を明らかにすることを目的とした。

本研究で卒業生の在学時の自然保育の授業や研修会等への参加状況や、自然保育に対する認識を検証することは、自然保育を実践できる保育者養成のための授業や課外活動などの自然保育に関する学びの機会の設定や学びの仕組みを再構築することにつながるだろう。

2. 「信州型自然保育研修制度」と本学の自然保育関連事業の概要

まず、信州型自然保育の研修制度について確認する。信州型自然保育の研修制度には、3つの形式の学びの機会がある。一つ目は保育者同士が交流しながら学ぶことができる「研修交流会」、二つ目は園や自治体に講師が派遣されて自然保育の理論を学んだり、実際に自然保育を実

践・体験しながら学んだりする「専門研修」、三つ目は研修を希望する保育者が、県が指定する園の保育に1日入り込んで自然保育を体験する「受入型研修」である（藤田2022）。2021年度はコロナ禍であるにもかかわらず、どの研修会も複数回開催されており、自然保育研修会のニーズが高まっていることがわかる。

次に、本学における自然保育関連事業について確認する。事業の一環である「やまほいく研修」は2016年度に県内外の保育者を対象に本学が主催となって実施したのが最初である。この研修会には希望する学生はスタッフとして、本学教職員と共に運営に参画してきた。もう一つの事業として2016年度から実施している取り組みが、2つの野外保育園（認可外保育施設であり、信州型自然保育認定制度の特化型の認定園）への視察である。2016年度には、教職員のみでの視察であったが、2017年度からは、学生と教職員が一緒に視察に行くようになった。さらに、2018年度には、授業科目「自然保育Ⅰ」、「自然保育Ⅱ」を2年次前期と後期の選択科目として開講した。翌年の2019年度に、もともとあった2年次からのコース編成を改変し、「自然保育コース」を設置し、自然保育コース必修科目として「自然保育Ⅰ」、「自然保育Ⅱ」が位置づけられた。「自然保育Ⅰ」は2年次前期、「自然保育Ⅱ」は2年次後期の授業科目であり、自然保育コースの学生は年間を通して自然保育について学ぶことができる。

本学においても、2021年度で自然保育関連事業を開始して丸6年が経過したことになるが、保育者養成の段階での自然保育の学びは始まったところである。実際に、自然保育を担う保育者養成の分野での内容や方法に関する研究は見当たらない。

一方で、自然体験活動を指導する小・中学校教員を目指す学生の育成に関する研究として、豊澤 他（2010）は、自然体験活動を指導する教員を養成するには、学生自らの体験を豊かにしたうえで、体験活動を教材・学習材としてとらえるようになるための体験が必要であることを指摘している。また、下永田 他（2018）は、自分自身の実習経験を重視した活動から、運営・指導できるようになるための活動へとステップアップしていくカリキュラムはあるものの、学生が児童・生徒への指導、対応に関する能力を身につけることが難しい傾向がみられたことから、児童・生徒がいる場での自然体験活動を経験する必要があることを明らかにしている。このように、教員養成の分野では、自然体験活動を指導する学生を養成するためのカリキュラムの内容や方法について研究されている。

そこで、本稿は、これらの先行研究も参考に、自然保育を実践する保育者を目指す学生を養成するための授業内容や方法の検討を行うために質問紙調査を実施した結果を報告する。

3. 調査概要

3-1 調査方法と調査期間

本調査では、本学が自然保育に関する事業を開始した2016年度に2年生だった2016年度の卒

業生から、本調査を実施した前年度に卒業をした2019年度卒業生計375名を対象とした。

調査期間は2020年12月～2021年1月であり、卒業生名簿をもとに学校を通じた託送法により自記式質問紙調査票を郵送した。配布できたのは352名であり、85名から回答を得た。回収率は24.1%であった。

なお、本稿では卒業年度ごとに学生の意識や取り組みを比較するものではないことを断っておく。というのも、本学では2016年度より徐々に自然保育関連事業を取り入れていったため、2016年度と2019年度とでは、本学における自然保育関連事業の数も、本学の教員の自然保育に対する意識も、さらに言えば、長野県内における自然保育に対する世間の関心度も異なるため、この時期に在学していた学生は、年度ごとに自然保育に関わる機会が大きく異なると考えられる。本調査は、本学において、自然保育の保育者向け研修会、自然保育認定園の視察を開始した2016年度から、2018年度の授業科目「自然保育」（選択）の設置を経て、自然保育コースの導入と授業科目「自然保育Ⅰ」、「自然保育Ⅱ」のコース必修化となった2019年度までを「自然保育の創設時期」として、当時在学していた学生の意識や考え方、取り組み方の傾向を確認していく。なお、本調査は、上田女子短期大学研究倫理委員会の承認を得て行われた。

表 1. 回答者の基本データ

		度数	%
卒業年度	2016年度	19	22.4
	2017年度	18	21.2
	2018年度	26	30.6
	2019年度	18	21.2
取得 免許・資格	幼稚園教諭免許	82	96.5
	保育士資格	81	95.3
	レクリエーション・インストラクター資格	6	7.1
	介護職員初任者研修修了証明書	18	21.2
	自然体験活動指導者（NEAL リーダー）	11	12.9
現在の職業	認可保育所（保育園）保育士	34	40.0
	認定こども園保育教諭	15	17.6
	幼稚園教諭	9	10.6
	施設保育士（児童養護施設・療育施設等）	7	8.2
	認可外保育施設保育士	2	2.4
	障害者支援施設の職員	3	3.5
	無職	4	4.7
	その他の職業	11	12.9
現在の勤務地	長野県内	57	67.1
	長野県外	25	29.4

3-2 回答者の基本属性

まずは回答者の基本データを確認する（表1）。2016年度の卒業生は19名（22.4%）、2017年度の卒業生は18名（21.2%）、2018年の卒業生は26名（30.6%）、2019年度の卒業生は18名（21.2%）であった。

免許や資格の取得については、幼稚園免許取得者は82名（96.5%）、保育士資格取得者は81名（95.3%）、レクリエーション・インストラクター取得者は6名（7.1%）、介護職員初任者研修修了者は18名（21.2%）であった。また、自然体験活動指導者（NEALリーダー）の取得者は11名（12.9%）であった。なお、本学において、自然体験活動指導者（NEALリーダー）の養成講習を開始したのは2018年度であることから、本自然体験活動指導者（NEALリーダー）の項目に限り、2018年度と2019年度の卒業生のみが、回答の対象者である。

現在の職業については、最も多かったのが認可保育所（保育園）保育士で34名（40.0%）、次に認定こども園保育教諭で15名（17.6%）、幼稚園教諭9名（10.6%）であった。

現在、長野県内で勤務している者は57名（67.1%）と7割弱、長野県外で勤務する者は25名（29.4%）と3割程度いた。

4. 調査結果

4-1 在学時に熱心に取り組んでいた活動

まず、卒業生は在学時にどのような活動に熱心に取り組んでいたのかを確認する。「在学時に熱心に取り組んだこと」について示したのが図1である。在学時に「熱心に取り組んだ」（「と

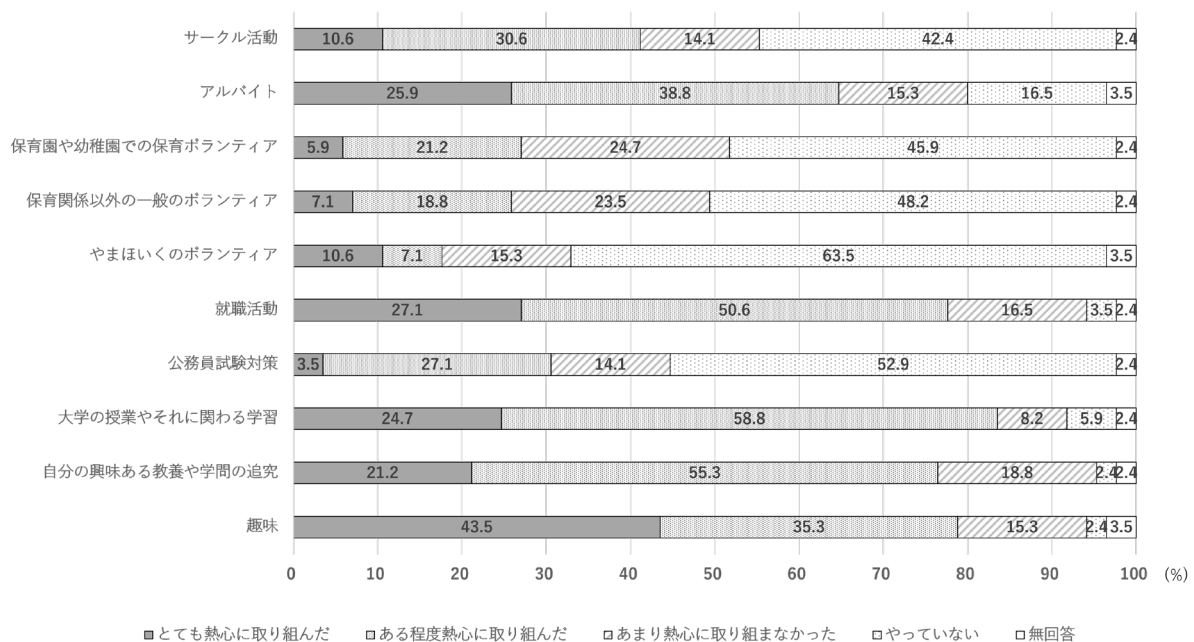


図1. 在学時に熱心に取り組んだこと

でも熱心に取り組んだ」と「ある程度熱心に取り組んだ」と答えた割合が最も高かった活動は、「大学の授業やそれに関わる学習」(83.5%)であり、「趣味」(78.8%)、「就職活動」(77.7%)、「自分の興味ある教養や学問の追求」(76.5%)、「アルバイト」(64.7%)と続く。ボランティアについては、「保育園や幼稚園での保育ボランティア」を「熱心に取り組んだ」と答えた学生は27.1%、「保育関係以外の一般のボランティア」が25.9%、「やまほいく研修会のボランティア」17.7%であった。特に、「やまほいく研修会のボランティア」を「熱心に取り組んだ」と回答した者は2割にも満たないという結果であった。

ここから、大学の授業やそれに関わる学習には熱心に取り組む学生の姿が浮かび上がってくる。それでは、卒業生は在学時に、どのような学習分野に対して熱心に取り組んだのかをみていく。

4-2 在学時に熱心に取り組んだ学習内容

保育者養成課程で学ぶ内容を細分化して尋ねた結果が図2である⁽¹⁾。おおむねどの学習分野に対しても「熱心に取り組んだ」(「とても熱心に取り組んだ」と「ある程度熱心に取り組んだ」)と回答していることがわかる。ここから在学時には、どの学習分野に対しても、まんべんなく真面目に取り組んでいた様子がみてとれる。

具体的に確認していくと、「熱心に取り組んだ」と回答した卒業生の割合が最も高いのは「音

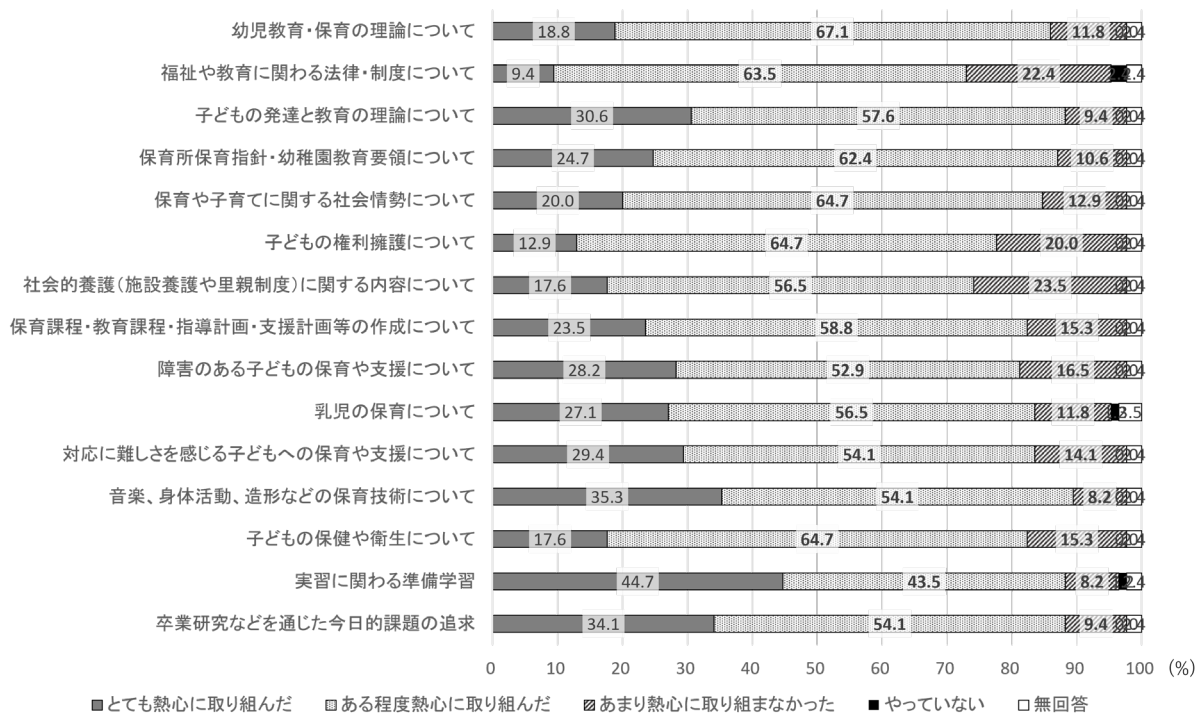


図2. 在学時に熱心に取り組んだ学習内容

楽、身体活動、造形などの保育技術について」(89.4%)であり、次いで「実習に関わる準備学習」、「卒業研究などを通じた今日的課題の追求」、「子どもの発達と教育の理論について」がそれぞれ88.2%であった。実践に役立つような保育技術や実習、発達への理解に関わる授業に力を入れている傾向を読み取ることができる。また、熱心に取り組んだ学習内容の上位に卒業研究が入っていることから、本学では卒業必修であり、12月半ばに提出の締切日を定めている卒業研究は、学生が熱心に取り組んだ学習であったことがわかる。

4-3 自然保育に対する興味関心の度合い

2015年度に長野県が自然保育認定制度を創設したことを機に、2016年度より本学でも自然保育関連事業を年々増やしていった。それではいったい、自然保育関連事業創設期に在学していた学生たちは、自然保育に対して興味を持ったり、関心を向けたりしていたのだろうか。卒業生に「在学時の自然保育への関心」について尋ねたところ、「かなり関心があった」と答えた者が28.2%、「まあ関心があった」と答えた者が54.1%であり、全体の8割以上の者が在学時に自然保育への関心があったと回答している。一方で、「自然保育を知らなかった」と回答した者も1.2%いたことがわかった(図3)。

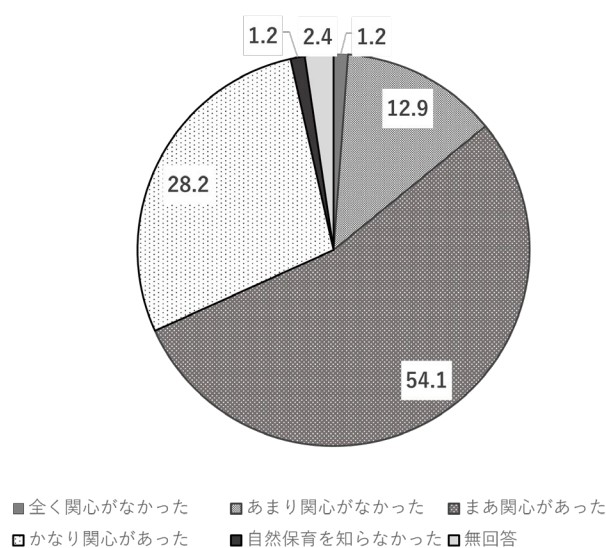


図3. 在学時の自然保育への関心

4-4 在学時に参加したことがある自然保育の活動

自然保育という言葉が長野県の保育現場や保育者養成校で広まり始めてはいたが、自然保育への取り組みが始まったばかりの時期に、8割以上の学生が自然保育に関心を向けていたわけだが、それでは、当時の学生は、本学で取り組み始めた自然保育関連事業にも参加していたのだろうか。「学生が在学時に参加したことがある活動」について尋ねたのが図4である。「参加

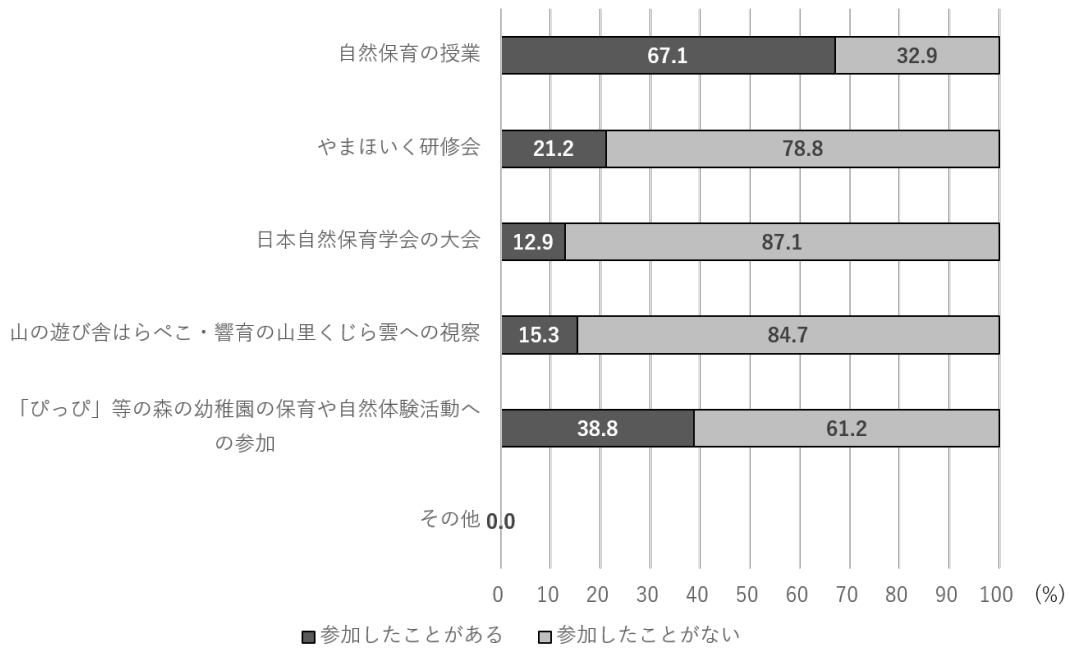


図 4. 在学時に参加したことがある活動

したことがある」と答えた者が最も多かったのは「自然保育の授業」(67.1%)であり、続いて「森のようちえんの保育や自然体験活動への参加」(38.8%)、「やまほいく研修会」(21.2%)、「森のようちえんの視察」(15.3%)であった。

なお、この質問項目については補足が必要である。まず、「自然保育の授業」については、2年生の選択科目として「自然保育Ⅰ」(前期)と「自然保育Ⅱ」(後期)を開講したのが2018年、自然保育コースの創設に伴い「自然保育Ⅰ」(前期)、「自然保育Ⅱ」(後期)を2年生のコース必修化したのが2019年であるため、自然保育の授業を受講するチャンスがあった学年は、2018年度卒業生と2019年度卒業生の2学年である。ところが、「自然保育の授業」に参加したと回答した学生が6割強もいた。考えられるのは、卒業生の記憶に残っているのは、カリキュラムに位置付けられていた授業科目「自然保育」ではなく、何らかの授業での「自然保育」に関わる講義や実践であるということだ。学生は授業のなかで自然保育について学んだことをもって「自然保育の授業」と答えた可能性もある。

さらに「日本自然保育学会の大会」であるが、2017年11月に本学で開催した日本自然保育学会第2回大会(上田市)及び、翌年の2018年日本自然保育学会第3回大会(東京都)については、前者は当時の1年生と2年生が、後者は当時の2年生がスタッフとして参加することが可能であった。つまり、「日本自然保育学会の大会」に参加したと回答できる学年は、2017年度卒業生と2018年度卒業生と限定される。

「森のようちえんの保育や自然体験活動への参加」について参加したと答えた学生は38.8%であった。この回答の内訳としては、自然保育の授業の一環として東御市の身体教育医学研究

所が中心になり楽育ひろばtomiが主催する「里山探検活動」に参加したり、軽井沢町にある「森のようちえん ぴっぴ」に授業の一環又は自主的に見学に行ったりしたことが想定される。また、授業とは無関係に参加した子どもキャンプへのボランティアなども含まれることが想定される。

「はらぺこ・くじら雲視察」とは、学生と本学教職員が、自然保育認定制度の特化型の認定園である長野県伊那市にある「山の遊び舎 はらぺこ」と長野県安曇野市にある「響育の山里 くじら雲」の2園を視察し、園の保育者と懇談をしていくというものである。2017年度からは毎年、各園に対して10名程度の学生を募集し、可能な限り授業開講期間を避け、視察先の活動内容に支障のない時期に視察を実施してきた。それぞれ別日程で計画したため、「山の遊び舎 はらぺこ」と「響育の山里 くじら雲」の両方を視察した学生もいる。

本学独自の保育者向け研修会である「やまほいく研修会」に、学生はボランティアスタッフとして参加する。この「やまほいく研修会」は、2016年度から2019年度の間は、1年間に4回実施していたことから、在学時に何回も参加する学生もいた。

そこで、「やまほいく研修会」に参加したと答えた学生に研修会への参加回数について確認した。「やまほいく研修会への参加回数」について尋ねた結果、参加は「1回」と答えた者が9名であったが、「2回」は4名、「3回」は5名、「4回」は1名、「5回以上」参加したと答えた学生は4名いた（図5）。つまり、14名（16.4%）の学生が「2回」以上「やまほいく研修会」にボランティアとして参加しており、「やまほいく研修会」に1回参加したことがきっかけで、その後も繰り返し参加する学生が一定数いたことがわかる。

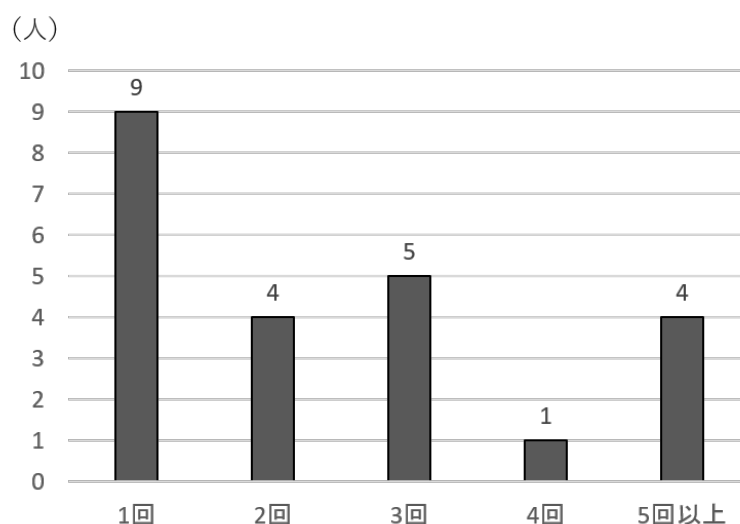


図5. やまほいく研修会への参加回数

4-5 在学中の自然保育に関する理解

先に示した「在学時の自然保育への関心」（図3）より、在学時に自然保育への関心があった

と答えた者は8割以上いたことがわかったが、自然保育に対する考えや自然保育を実施するイメージは持っていたのだろうか。図6は、「在学時の自然保育に対する理解」について問う7つの設問に対し「はい」と「いいえ」の二択で確認した結果である。「はい」と回答した割合が最も多かったのは「野外での活動にふさわしい服装や装備を理解していた」(75.3%)であった。次いで、「自然を活用した保育を実践する際に大切にしたい考えをもっていた」と「野外での活動に必要な準備や用具のイメージをもつことができた」でいずれも61.2%、「自然保育に対する自分の考えをもっていた」で51.8%の者が「はい」と回答していた。

一方、「自然保育の実践のイメージをもっていた」、「周囲に自然保育の基本的な考え方を伝えられた」、「長野県の自然保育の概念を説明できた」について「はい」と回答していた者はそれぞれ3割程度であった。

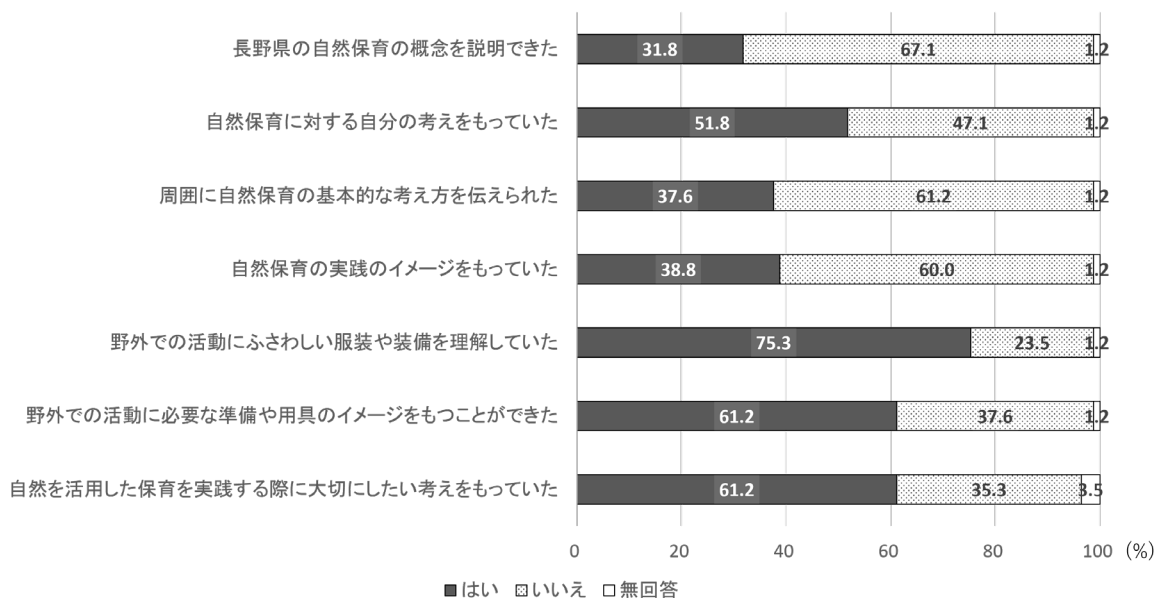


図6. 在学時の自然保育に対する理解

5. 考察

5-1 実践的な科目に熱心に取り組む学生の傾向性

学生は大学の授業やそれに関わる学習には熱心に取り組むが、ボランティア活動にはそれほど熱心ではない様子がみてとれた。ボランティア活動には、学生が自主的に取り組む必要があるため、学生に積極性や意欲がないからだという解釈も成り立つ。しかし、「アルバイト」を熱心に取り組んだ学生は6割程度、「サークル活動」は4割であったことを考えると、次のように解釈することもできる。2年制の保育者養成校に通う学生は、2年間で幼稚園教諭の免許と保育士資格を取得するための授業と実習、そのための課題に時間を費やし、アルバイトやサークル活動をする時間はおろか、ボランティア活動をする時間をとることも難しいのではないかと⁽²⁾。

大学の授業においては、おおむねどの分野の学習にも熱心に取り組んでいたが、なかでも音楽・身体活動・造形などの保育技術や実習に関わる準備学習に力を入れていた傾向が高かった。保育技術や実習に関わる準備学習は、実践的であり、授業で学んだり身に付けたりしたことが保育現場で役立つと実感しやすいことが、在学時に熱心に取り組む学習に影響するのかもしれない。

今回調査対象とした卒業生のうち、学生時代に「自然保育」の授業が開講されていたのは、わずか2学年である。そのうち2018年度卒業生は選択、2019年度卒業生は自然保育コースの者のみコース必修だったにもかかわらず、「自然保育の授業」に参加したと答えている者が6割いた。実際には「自然保育の授業」を受けたわけではないが、在学時に授業に熱心であった卒業生であれば、何らかの授業のなかで「自然保育について学んだ」と考えたかもしれない。

以上のことから、2年制の保育者養成校に通う学生は、大学の授業、特に実践的な学習には熱心に取り組むが、サークル活動やボランティア活動にまで手が回らないとするならば、学生の自然保育の学びの機会としては授業を有効に活用していくことを積極的に検討していくことも必要である。

5-2 学生の自然保育への関心度と自主的な学びの機会

在学時の自然保育への関心についての質問では、全体の8割以上の者が、在学時に自然保育への関心があったと回答していた。これに対して、学生の自主的な参加となる自然保育認定園の視察や「やまほいく研修会」に参加した者は1割から2割に留まっている。自然保育への興味関心は全体的に高い一方で、学生が自然保育を学ぶ機会は「自然保育の授業」に限られており、本学で用意した「やまほいく研修会」や自然保育認定園の視察が、学生の学びの機会としては十分には活かされていないことがわかる。

信州型自然保育認定制度が創設され、本学でも自然保育関連事業を進めていくなかで、当時の学生は自然保育に関心を持っていたが、自主的に自然保育を学ぶ機会に参加するには至らなかったようだ。この要因として、先に述べたサークル活動やボランティア活動と同様、在学時には自然保育関連事業に参加する時間が取れないことが挙げられるかもしれない。ただし、自然保育研修会である「やまほいく研修会」に参加していた学生の半数以上は、2回以上「やまほいく研修会」に参加していたことから、一度「やまほいく研修会」に参加すると、次の研修会にも参加する傾向があると言えるかもしれない。そこで、学生が、研修会や視察などに1回でも参加するような仕掛けを作ることで、学生の参加回数を増やすことが期待される。

ところで、学生が自然保育を学ぶために、実際の保育現場を視察する機会は大変貴重である。特化型の自然保育認定園の視察は、現状では年に2回しか計画されておらず、1回あたりの募集人員も10名程度と限られている。特化型の自然保育認定園の視察による学びの機会が一部の

学生に限定されていることは今後の課題である。視察先での学びを視察後に他の学生に発表するなどの情報共有の仕組みをつくることで、視察に参加できなかった学生の学びとして波及させることができるかもしれない。また、視察先を、移動手段の確保を必要しない近郊の園で検討したり、視察の実施頻度を増やしたりすることも検討する余地はある。より、多くの学生が実際の保育現場に足を運び実習とは異なる心持で現場の保育から自然保育を学ぶことができる方法を検討していきたい。欲を言えば、一人の学生が継続的に現場に足を運ぶことができると、より深い学びに繋がることも考えられる。

5-3 自然保育に対する考えを説明することに対する在学時の意識

在学時の自然保育に対する理解に関する設問では、「野外での活動にふさわしい服装や装備を理解し、準備物や用具のイメージを持っていた」については、半数以上の者が理解していたと回答していた。野外での服用や用具については、目で見て確かめられる事柄であり、実習でも学ぶことができることから、学生の理解を促しやすいと考えられる。

「自然保育を実践する際に大切にしたい考えや自然保育に対する自分の考え」についても、多くの学生が理解していたと回答していた。一方、「自然保育の実践のイメージをもっていた」、「周囲に自然保育の基本的な考え方を伝えられた」、「長野県の自然保育の概念を説明できた」と回答した者は3割程度に留まった。在学時には、自然保育の実践と自然保育そのものに対する自分の考えは持っているが、それを他者に説明することはできない傾向がうかがえた。自然保育に限ったことではないが、他者に対して自分の考えを説明するというところに苦手意識をもつ学生は多い。また、長野県の自然保育の概念を説明するためには、ある程度の「知識」を必要とする。保育者から「自然保育のよさを保護者にどう伝えたらよいかわからない」という話を聞くことがある。保育者も自然保育について保護者に説明することが困難であるのだ。そこで、自然保育を担っていく質の高い保育者を養成していくにあたり、自然保育の概念をきちんと押さえた上で、学生同士で自然保育の実践を検討し合い、自分の考えを伝え合う機会を増やしていくことが今後の課題である。

山口・寺（2020）が、「信州型自然保育」認定を受けた公立保育園の保育士を対象に実施した調査によると、認定の前後で屋外での遊びや活動の実施頻度が有意に増え、結果的に保育者の自然に関する知識を深めようとする意欲や探求心も高まり、屋外での保育に対する保育者の自信が高まっていることから、「信州型自然保育」の認定は、各園や保育者が実践を振り返り、その意味を再認識するための契機として作用していると述べている。屋外での保育活動に対して保育者の自信が高まることによって、保育に還元されるものは何であるか。ここに自然保育の可能性が結集されているかもしれない。

また、高木（2017）は、「信州型自然保育認定制度」の意義について、「現場の実践の共有」

とも述べており、就学前の子どもの保育・教育に携わる施設間の垣根を越えて、保育・幼児教育の全体的な質向上を図っていくための枠組みと理解することもできる。その視点で考えると、今後、卒業後のリカレント教育としての位置づけも大切にしていきたい。

注

- (1) 保育者養成課程で学ぶ内容項目については、平成28年度 指定保育士養成施設における教育の質の確保と向上に関する調査研究（厚生労働省委託調査研究事業）の調査を参照した。
- (2) 4年制の教員養成大学に通う学生への調査では、「部活動・サークル活動」や「アルバイト」を熱心に取り組む学生が7割から8割いたことから（山口 他 2019）、2年制の保育者養成校に通う学生のうち「サークル活動」や「アルバイト」を熱心に取り組んだ学生の割合が低いことがわかる。

引用・参考文献

厚生労働省 平成28年度 指定保育士養成施設における教育の質の確保と向上に関する調査研究（厚生労働省委託調査研究事業）

酒井真由子（2018）「信州型自然保育研修会における短期大学の役割－『信州上田“やまほいくの里山”プロジェクト～上田女子短期大学の裏山で遊ぼう～』事業を通して－」『児童文化研究所所報』40号、pp. 113-126

下永田 修二、七澤 朱音、西野 明、杉山 英人、小宮山 伴与志、佐藤 道雄、坂本 拓弥（2018）「保健体育科における宿泊を伴う自然体験活動が教員を目指す学生の意識に与える影響」『千葉大学教育学部研究紀要』第66巻第2号、pp. 183-190

藤田良子（2022）「信州型自然保育（信州やまほいく）の研修制度（研修事例）」『森と自然の育ちラボ2021』人材育成の仕組みづくり発表資料、長野県県民文化部こども若者局こども・家庭課

高木三郎（2017）「信州型自然保育認定制度」の創設過程と意義についての考察」『富山短期大学紀要』第53巻、pp. 12-26

豊澤弘伸、狩野克彦、松浦光和（2010）「教員養成における『体験』活動に関する一考察」『宮城学院女子大学発達科学研究』、pp. 19-28

山口美和、河野誠哉、酒井真由子、西朋子（2019）「大学における教員就職支援の利用実態と教

育効果—国立大学教員養成学部 4 年生への質問紙調査の分析から—」『山梨学院生涯学習センター紀要』第23号、pp. 55-78

山口美和、寺眞智子（2020）「『自然保育』に関する認定が保育士の意識と行動に与える影響—『信州型自然保育』認定を受けた公立保育園への調査を通して—」『上越教育大学研究紀要』第39巻第2号、pp. 395-405

[付 記]

本研究は、令和 2 年度私立学校研究助成金「自然保育の養成カリキュラムの効果検証と養成プログラムの開発」による研究成果の一部である。